

古代タミル語における人称表示接辞の母音長音化について

家 本 太 郎

は じ め に

古代タミル語¹⁾における動詞人称表示接辞²⁾は以下のような異形態³⁾をもつ。

	人称表示接辞
単数 1 人称	<i>-eṅ, -ēṅ, -al, -aṅ</i>
2 人称	<i>-ai, -āy, -ōy</i>
3 人称男性	<i>-aṅ, -āṅ, -ōṅ</i>
3 人称女性	<i>-aḷ, -āḷ, -ōḷ</i>
3 人称中性	<i>-tu, -ttu, atu</i>
複数 1 人称	<i>-am, -ām, -em, -ēm</i>

1) 古代タミル語は、原典資料および言語的特徴から、以下のように3期に分けられるべきであるが [Lehmann 1994: 2], 本稿では関係する文法構造の改新を考慮し, ①および②を早期古代タミル語, ③を後期古代タミル語と呼ぶ。

① Früh-Alt Tamil (100 v. Chr.)

② Mittel-Alt Tamil (100 v. Chr.- 300 n. Chr.)

③ Spät-Alt Tamil (500 - 700 n. Chr.)

早期古代タミル語資料は以下のテキストによる。略語も付記する。

早期古代タミル語

Aiñ.	<i>Aiñkurunūru</i>
Akam.	<i>Akanānūru</i>
Ciru.	<i>Cirupaṅārruppaṭai</i>
Kurun.	<i>Kuruntokai</i>
Malai.	<i>Malaiṭaṭukāṭam</i>
Matu.	<i>Maturaiikkāñci</i>
Naṛ.	<i>Narriṇai</i>
Neṭu.	<i>Neṭunalvāṭai</i>
Paṭiṛru.	<i>Paṭiṛruppaṭai</i>
Perum.	<i>Perumpānārruppaṭai</i>
Puram.	<i>Puraṅānūr</i>
Poruna.	<i>Porunarārruppaṭai</i>



2 人称	-ir, -īr
3 人称通性	-ar, -ār, -ōr
3 人称中性	-a

また、類似した異形態分布は、人称名詞⁴⁾の人称表示接辞にもみられる。

	人称表示接辞
単数 1 人称	-eṇ, -ēṇ
2 人称	-ai, -āy
3 人称男性	-aṇ, -āṇ, -ōṇ
3 人称女性	-al, -āl, -ōl

↘ 後期以降の古代タミル語の資料は以下による。古代タミル語文典である *Tolkāppiyam* は重層的な構成となっていて、所属時期を一義的に決定できない。この重層的構成に関しては、高橋 [1989] に詳しい考察がある。本稿では便宜上、後代以降に含めた。

後期（以降）古代タミル語

Kali.	<i>Kalittokai</i>
Pari.	<i>Paripāṭal</i>
Muruku.	<i>Tirumurukāṛṛuppaṭai</i>
Tol. III.	<i>Tolkāppiyam Collatikāram</i>
Cilap.	<i>Cilappatikāram</i>
Cirupaṇ.	<i>Cirupaṇcamūlam</i>
Kuṛaḷ.	<i>Tirukkuraḷ</i>
Maṇi.	<i>Maṇinēkalai</i>
Nālaṭi.	<i>Nālaṭiyār</i>
Paḷamoḷi.	<i>Paḷamoḷināṇūru</i>
Ti. Ma.	<i>Tiṇaimālaināṛṛaimpaṭu</i>
Ti. Mo.	<i>Tiṇaimoḷiaimpaṭu</i>

2) 古代タミル語の肯定動詞における形態素配列は以下のいずれかである。inflectional increment は、inflectional suffix, euphonic increment, euphonic suffix と称され、共時的には意味的・文法的機能を持たない空形態素である。cumulative 接辞は、時制表示接辞と人称表示接辞が融合した、かばん形態である。本稿の対象となるのは、①②③に現れる人称表示接辞である。

- ① 動詞語幹＋時制表示接辞＋人称表示接辞
- ② 動詞語幹＋inflectional increment＋時制表示接辞＋人称表示接辞
- ③ 動詞語幹＋時制表示接辞＋inflectional increment＋人称表示接辞
- ④ 動詞語幹＋cumulative 接辞

また、形態的否定動詞における形態素配列は以下の通りである。

動詞語幹＋否定表示接辞（3 人称中性以外は、ゼロ形態）＋人称表示接辞

- 3) “-”は接辞間の区切りを示し，“.”は形態素間の区切りを示す。
- 4) 古代タミル語を始め、全てのドラヴィダ諸語で在証される文法的範疇で、名詞・形容詞語幹に数・人称（3 人称では、性も）を表示する人称接辞を付加して形成される。古代タミル語では、完全なパラダイムが保持されている。

3人称中性	-tu, -ttu, -atu
複数1人称	-am, -ām, -ēm
2人称	-ir, -īr
3人称通性	-ar, -ār
3人称中性	-a

これらの異形態の分布については、形態音韻論的に記述する立場と、何らかの言語的改変が進行している段階であり、幾つかの形式が併存しているとする通時的な見方がある。

前者の立場は、例えば、Dhamotharan [1972] による *Tirukkuraḷ* における分布の分析である。言語素論による同分析は、*Tirukkuraḷ* 内部の共時的分布には有効であった。

後者の立場は、古代タミル語サンガム文献全体の中で、これら異形態の分布を記述しようとするものである。動詞句の人称表示接辞の分布については、Akattiyalīnkam [1983] が早期の古代タミル語では、短母音を含む形式が多く見られ、後期に至り長母音形式が多数が優勢となる事実を指摘している。また、Iemoto [1995] は、形容詞を含む人称名詞の人称表示接辞においても同様の傾向がみられることを示した⁵⁾。

本稿は、当該接辞に含まれる母音が短音から長音に通時的に改新する事実を是認し、この改変の引き金になった事象に関する仮説を提出するものである⁶⁾。

I 長音化を起こさせた先行要素

I-1

本稿での仮説は、人称表示接辞の長音化を起こさせた要素は、当該接辞に先行する時制表示接辞を含む句内の関係節形成接辞 *-a* であったとするものである。

I-2

改新のプロセスは以下のものであったと推測する。*-a* で始まる、1人称複数 *-am*、2人称単数 *-ai*、3人称単数男性 *-an*、同女性 *-aī*、3人称複数通性 *-ar* は先行する関係節形成接辞 *-a* と融合し、それぞれ *-ām*, *-āy*, *-ān*, *-āī*, *-ār* と長音化した⁷⁾。結果形となったこれら長音形

5) これは、形容詞形成接辞 *-a* が一般化するに従い、*a-* で始まる人称表示接辞との間で融合が起こり、長音化したとする仮説を提案したもので、本稿と並行する考察である。

6) この仮説は Meenakshisundaran [1965:88] の延長線上にあるものであるとも言えるし、彼の直観を違った観点から証明しようとするものでもある。ただ、彼は relative chronology の視点を導入せず、変化のメカニズムを提示しようとはしない。

7) *-āy*, *-ān*, *-āī*, *-ām*, *-ār* は、それぞれ *-āy*, *-ān*, *-āī*, *-ām*, *-ār* と長音化した形式の更なる革新形である。

式は、他の形式にも影響を与え、類推作用あるいはパラダイムの均衡を保持しようとする指向により、それらも長音化し、中期タミル語に継承された。この長音化には否定定型動詞形成に用いられる人称表示接辞が既に起こしていた長音化の類推も作用したと考えられる。ここに看取される類推の原理は、「動詞語幹＋時制表示接辞＋人称表示接辞」という構造を、「動詞語幹＋関係節形成接辞＋代名詞的要素」とする、言語構造の再解釈である。通時的には、この構造は、再度、時制表示接辞に人称表示接辞が付加された形式に再々解釈される。ここで作用している原理は、後述するように、張り合い関係を経て、結果的に形態的に類似した形式となっていた participial noun⁸⁾を独立の範疇とし、文法全体の均衡を保とうとする指向である。

II 仮説を支持する証拠

II-1

以下に、人称表示接辞と先行の時制表示接辞との間にバリアが存在した場合、融合が生じない環境を示す。

II-2

まず、先行の時制表示接辞に inflectional increment の *-an* が付加された場合、融合は起こらず、長音化しない⁹⁾。以下に例を示す¹⁰⁾。この形式が早期古代タミル語から後期古代タミル語に一様に分布し、後続の人称表示接辞にも選択制限を受けていないことが看取される。

<i>cey-t-an-ai</i>	“You did”	Naṛ., Aiñ., Akam., Cilap., Maṇi
<i>ari-nt-an-en</i>	“I knew”	Kurun., Akam.
<i>ari-nt-an-ar</i>	“they knew”	Kurun., Paṭiṛṛu., Akam., Puram.

8) 殆どのドラヴィダ諸語に在証される範疇で動詞の名詞化された形式である。古代タミル語の形成法については、IV-2をみられたい。

9) この環境については、Cēṇavaraiyarによる *Tolkāppiyam* への注釈書 (sūtra 687) において、指摘されているが、彼も人称表示接辞の母音長音化の文法範疇との有機的な関連については言及していない。更に *Tolkāppiyam* 以来の土着文法家は、verbal participle (タミル語伝統文法で、*viṇai eccam* と称される範疇) に人称表示接辞が付加され、定動詞構造が形成されるとする [Meenakshisundaran 1965:88]。同種の分析は、Andronov [1996:123] にもみられる。彼は、人称表示接辞の起源を存在動詞の直説法現在形に求める。

10) 以下においては、便宜上、テキスト名のみを挙げた。当該語形の出現箇所は、*Index des mots de la littérature tamoule ancienne* [1967-1970] または Lehmann & Malten [1992] を参照されたい。

<i>ari-nt-aṅ-aḷ</i>	“she knew”	Nar., Kurun., Aiñ., Kali., Akam., Cilap., Maṇi., Akam.
<i>aḷu-t-aṅ-ai</i>	“you wept”	Kali., Maṇi.
<i>iḷa-nt-aṅ-a</i>	“they lost”	Nar., Kurunt., Puram.
<i>urai-tt-aṅ-am</i>	“we said”	Nar.
<i>urai-tt-aṅ-aṅ</i>	“he said”	Nar., Puram., Cilap., Maṇi.
<i>koṅṭ-aṅ-aṅ</i>	“he had”	Ain., Akam., Puram., Maṇi.
<i>koṅṭ-aṅ-eṅ</i>	“I had”	Puram.
<i>iru-nt-aṅ-ir</i>	“you were”	Puram.
<i>kaṅṭ-aṅ-aḷ</i>	“she saw”	Pari., Cilap.
<i>toḷu-t-aṅ-am</i>	“we worshiped”	Puram.
<i>toḷu-t-aṅ-em</i>	“we worshiped”	Nar., Pari., Puram.
<i>keṭṭ-aṅ-aṅ</i>	“he was spoiled”	Kali., Cilap., Patirru., Maṇi.

II-3

動詞語幹に否定接辞 *-al*¹¹⁾ が付加された場合、子音終わりとなり、母音の融合が起きない。

amai- (to set)

amai. y-al-eṅ Puram.

amai. y-al-am Aiñ.

amai. y-al-ai Nar.

cūḷ- (to surround)

cūḷ-al-aṅ Kurun.

añcu- (to terror)

añc-al-am Puram.

añc-al-ar Akam., Paḷamoḷi.

kūr- (to say)

kūr-al-am Akam.

11) 否定接辞 *-il-* は, Agesthialingom [1979:124] によると, 僅か3例にとどまる。Verbal participle に否定動詞 *il-* が付加される形式が一般化した後の残存形式と考えられる。ここでも1人称のみ長音化母音をもつ。

kaṅk-il-ēṅ “will not see-I” Cilap. 18-12.

uṅṅ-il-aṅ “will not know-I” Puram. 310-6.

tuñc-il-āṅ “will not sleep-I” Nar. 319-11.

varai- (to marry)*varai. y-al-aḷ* Puram.**vāl-** (to live)*vāl-al-eṇ* Naṛ., Akam.*vāl-al-aḷ* Akam.**aṛi-** (to know)*aṛi-y-al-am* Kuṛaḷ.*aṛi-y-al-ar* Naṛ., Aiñ., Puram.*aṛi-y-al-aḷ* Kurun.*aṛi-y-al-aṇ* Aiñ., Patirru., Akam., Puram.*aṛi-y-al-em* Akam.*aṛi-y-al-ai* Patirru., Puram.**piri-** (to be separated)*piri-y-al-am* Naṛ., Aiñ., Akam., Nālaṭi., Kuṛaḷ.*piri-y-al-ar* Aiñ.*piri-y-al-aṇ* Kurun., Aiñ., Akam.*piri-y-al-eṇ* Aiñ., Kali.**cey-** (to do)*cey. y-al-ar* Naṛ., Puram.*cey. y-al-aḷ* Kali., Kurun., Cilap.*cey. y-al-a* Kuṛaḷ.

若干の例外が、1人称単数の場合である。なぜ1人称のみで長音形式が現れるか不明である。既に長音化が一般化している、形態的否定動詞形成に用いられる長音を含んだ形式が編入しようとしているのかもしれない。

amai-y-al-ēṇ Kali.*maṛa. v-al-ēṇ* Puram.*aṛik-al-ēṇ* Naṛ., Kali.*amaik-al-ēṇ* Kali.*aṛi-al-ām* Paḷamoḷi.*vāz-al-ēṇ* Naṛ., Kal.

また、複合動詞構造による周辺的な否定動詞 *al-* に付加される人称表示接辞の母音には長短両形式がみられ、当該接辞に関しては、一般的な動詞と同じ特徴をもっている。

II-4

先行の時制表示接辞に *-in-* が付加された形式には、早期古代タミル語では、殆どの場合、短音形式が付加されるのに対し、後期古代タミル語では、長音化形式が相対的に多く見られる傾向が他の時制表示接辞の場合に比して特に強い。理由は2つ考えられる。1つには、*-in-* による関係節化形式は、古代タミル語では未だ一般化していないためであろう。Agesthialingom [1979] によると僅か3例にとどまる。*niṭina* “which extended” Kurun. 309-3, *pōyina* “which left” Maṇi. 24-43, 24-70。2つには inflectional increment との形態上の類似からバリエアとなった可能性もあろう。すなわち、機能的位置が不明瞭であったのではないか。事実、*-in-* が *-an-* に付加された例はない。下に例を挙げるが、*-in-* 形式と *-i-* 形式が併存していることに注意されたい。

varuntu- (to suffer)

<i>varunt-i-y-a</i>	Tol-III, Nar., Kali., Akam., Puram., Maṇi.
<i>varunt-in-ru</i>	Puram.
<i>varunt-in-a</i>	Kali., Cilap.
<i>varunt-in-aḷ</i>	Naṛ., Kurun., Kali., Akam.
<i>varunt-in-an</i>	Naṛ., Cilap., Maṇi.
<i>varunt-in-ār</i>	Kurun., Paḷamoḷi.
<i>varunt-in-āḷ</i>	Kali.
<i>varunt-in-ēṇ</i>	Naṛ.
<i>varunt-in-eṇ</i>	Kali.
<i>varunt-in-ai</i>	Poruna., Naṛ., Akam., Puram., Cilap., Maṇi.

aṭaṅku- (to settle)

<i>aṭaṅk-in-a</i>	Ti. Mo., Cilap.
<i>aṭaṅk-in-ar</i>	Kurun., Cilap., Maṇi.
<i>aṭaṅk-in-aḷ</i>	Maṇi.
<i>aṭaṅk-in-an</i>	Maṇi.
<i>aṭaṅk-in-an</i>	Cirupaṅ.
<i>aṭaṅk-in-ēṇ</i>	Kali.

ēttu- (to praise)

<i>ētt-i. y-a</i>	Tol. III., Cilap., Maṇi.
<i>ētt-in-am</i>	Pari.
<i>ētt-in-ar</i>	Pari., Puram., Cilap.
<i>ētt-in-an</i>	Maṇi.
<i>ētt-in-āḷ</i>	Cilap.

<i>ētt-in-en</i>	Puram.
<i>ētt-in-ēm</i>	Pari.
mār- (to change)	
<i>mār-i. y-a</i>	Ciru., Perum., Naṛ., Patirru., Kali., Akam., Puram.
<i>mār-in-ru</i>	Kurun.
<i>mār-in-aṇ</i>	Puram.
<i>mār-in-en</i>	Kali.
ararru- (to lament)	
<i>ararr-i. y-a</i>	Cilap.
<i>ararr-in-aḷ</i>	Maṇi.
<i>ararr-in-en</i>	Cilap.
āṭu- (to move)	
<i>āṭ-in-am</i>	Naṛ.
<i>āṭ-in-ar</i>	Cilap.
<i>āṭ-in-aḷ</i>	Maṇi.
<i>āṭ-in-āy</i>	Kali., Ti. Ma.
<i>āṭ-in-āṇ</i>	Ti. Ma.
<i>āṭ-in-ir</i>	Puram.
<i>āṭ-in-ēṇ</i>	Ti. Ma.
<i>āṭ-in-ai</i>	Aiṇ., Akam.
<i>āṭ-in-ōṇ</i>	Cilap.
āku- (to became)	
<i>āy-in-am</i>	Kurun.
<i>āy-in-ar</i>	Akam., Puram.
<i>āy-in-aḷ</i>	Naṛ., Kurun., Aiṇ., Akam., Puram., Cilap., Maṇi.
<i>āy-in-aṇ</i>	Puram., Cilap., Maṇi.
<i>āy-in-ay</i>	Paḷamoḷi.
<i>āy-in-ār</i>	Paḷamoḷi.
<i>āy-in-āḷ</i>	Nālaṭi., Paḷamoḷi.
<i>āy-in-āṇ</i>	Cilap.
<i>āy-in-ir</i>	Maṇi.
nōkku- (to see)	
<i>nōkk-i. y-or</i>	Akam.
<i>nōkk-i. y-oḷ</i>	Nar.
<i>nōkk-in-ru</i>	Puram.

<i>nokk-in-a</i>	Puram., Cilap.
<i>nōkk-in-ar</i>	Matu., Patirru., Puram., Cilap.
<i>nōkk-in-aḷ</i>	Naṟ., Kurun.
<i>nōkk-in-aṇ</i>	Puram.
<i>nōkk-in-ay</i>	Paḷamoḷi.
<i>nōkk-in-aḷ</i>	Pari., Kuṟaḷ.
<i>nōkk-in-ir</i>	Kuṟaḷ.
<i>nōkk-in-eṇ</i>	Kurun.
<i>nōkk-in-ai</i>	Kali., Puram.
ūṭu- (to quarell)	
<i>ūṭ-in-aḷ</i>	Akam.
<i>ūṭ-in-ār</i>	Pari.
<i>ūṭ-in-āḷ</i>	Kuṟaḷ.
<i>ūṭ-in-ir</i>	Cilap.
ēku- (to sent)	
<i>ēk-in-a</i>	Akam.
<i>ēk-in-āṇ</i>	Kuṟaḷ.
<i>ēk-in-ai</i>	Naṟ.
toṭaṅku- (to begin)	
<i>toṭaṅk-i. y-a</i>	Paḷamoḷi.
<i>toṭaṅk-i. y-ōḷ</i>	Aiñ.
<i>toṭaṅk-in-ru</i>	Naṟ., Aiñ., Akam.
<i>toṭaṅk-in-a</i>	Naṟ., Aiñ.
<i>toṭaṅk-in-ar</i>	Naṟ.
<i>toṭaṅk-in-aḷ</i>	Naṟ., Akam.
<i>toṭaṅk-in-aṇ</i>	Aiñ., Kali.
<i>toṭaṅk-in-a</i>	Paḷamoḷi, Cirupañ.
<i>toṭaṅk-in-ēṇ</i>	Puram.
iraiṅcu- (to bow)	
<i>iraiṅc-i. y-a</i>	Neṭu., Naṟ., Kurun., Patirru., Kali., Akam., Puram., Maṇi.
<i>iraiṅc-i. y-ōḷ</i>	Akam.
<i>iraiṅc-i. y-ōṇ</i>	Puram.
<i>iraiṅc-in-a</i>	Malai.
<i>iraiṅc-in-aṇ</i>	Nar., Kali., Akam., Maṇi.
<i>iraiṅc-in-aḷ</i>	Kuṟaḷ.

iraiñc-iñ-em

Pari.

Ⅲ 否定構造との関係

Ⅲ-1

前節まででは、動詞語幹との間に何らかのバリアが存在する場合、融合が起きず当該人称接辞の長音化が阻止される事象を見た。この節では、否定形成接辞との類推の可能性について考察する。

Ⅲ-2

定動詞の否定表示接辞に付加される人称接辞は以下のように全て長音を含んだ形式となっている。

	人称表示接辞
単数 1 人称	-ēñ
2 人称	-āy
3 人称男性	-āñ
3 人称女性	-āl
3 人称中性	-ātu
複数 1 人称	-ām, -ēm
2 人称	-ir
3 人称通性	-ār
3 人称中性	-ā

形態上は、動詞語幹にこれらの人称表示接辞が直接、付加されるので、否定表示接辞はゼロ形態となる。共時的にはゼロ形態素による否定表示は言語類型論的には非常に珍しい現象であるとのことであるが¹²⁾、Caldwell [1913] 以来の分析、すなわち、否定表示接辞と人称表示接辞の初頭母音が融合し、長音化したものが、ゼロの否定表示接辞と再解釈されたものとするのが妥当である。タミル語におけるこの過程は、かなり早期において生起したと考えられ¹³⁾、長音を含む人称表示接辞が既に一般化している。本来のこの否定表示接辞の形式

12) 故河野六郎先生の御書簡による御教示による。

13) 甚だ思弁的な表現になるが、形態的否定動詞構造に用いられた人称表示接辞が長音化した現象と並行する類推がどの程度、意識されていたか探ることは容易ではない。Tolkappiyam の構成は、注 1) に述べたように重層的であるが、記述法は優れて共時的であり、ゼロ否定についての通時的な言及はない。同書が編纂された時期には既にゼロ否定の成り立ちが意識されていなかった

については、*-a- であるとする Caldwell [1913], Meenakshisundaran [1965], *-ā- だとする Israel [1973], Lehmann [1994] や Subrahmanyam [1971], -e- ~ -a- ~ -i- という異形態を想定する Subramoniam [1959] など見解の一致をみていない。定動詞構造との平行性を認める立場をとれば、時制表示接辞と同じスロットをとらねばならないので、動詞語幹 + a + 人称表示接辞となるが、-a- + -a- も -ā- + -a- も -ā- になる可能性があり、本稿の議論に直接影響を与えない。

また、先行要素に -a- が含まれ、後続要素 -a- との間に融合が起こり、長音化した形式として、否定関係節形成接辞 -ā- がある。この形式は、タミル語古代典文法 *Tolkappiyam* では、*ceyyā* という語形で示され、*cey-ā* と分節されている。関係節形成接辞 ϕ (ゼロ形態素) に否定表示接辞 -ā が付加されたとする解釈であるが (*cey. y- ϕ -ā*)、ゼロ形式による関係節形成法は、後代のタミル語にも他のドラヴィダ諸語にも類例がない。むしろ、-ā- を否定関係節形成接辞として記述したほうが整合性がある。本稿の立場は、先述のように、関係節形成接辞 -a- に、否定表示接辞 -a- が付加された形式 (*cey. y-a-a*) とする解釈であり、時制を伴った定動詞構造と並行的に記述することができる。

III-3

本稿の仮説は、定動詞構造において、人称表示接辞に先行する要素と当該接辞の初頭母音が融合し、長音化したとするものである。この先行要素は、関係節形成接辞 -a- であり、-a で始まる人称表示接辞との間に融合が起き、長音化現象は他の接辞にも拡大していった。この過程は、上述した、否定表示接辞と人称表示接辞の融合と同様の過程を進んだと考えられる¹⁴⁾。ここで問題になるのが、未来形関係節である [Meenakshisundaran 1965:88-89; Agesthialingom 1979:157]。kolpa や iruppa といった未来形関係節構造が在証されていないことである。ただし、系統上、古代タミル語に近い古層カンナダ語において、pāḍu-va “singing, nōḷ-p-a “seeing” などの関係節形式が見られ、タミル語が古形を残していないとも考えられる¹⁵⁾。更に、後述の participial noun の形成においては、ari. y-um-oṅ (Puram.

↘(あたかも、現代タミル語や現代カンナダ語話者の意識のように、真にゼロ化していた)か共時的記述に徹したためか、不明である。同書に対する注釈者 Cēnāvaraiyar も否定接辞 -a- や -e- を挙げるのみである。

14) 系統的に近い、古層カンナダ語にも並行した形成法 (ari.y-en “I don't know”) がみられるので、タミル語の先史に溯るとも考えられる。

15) これに関わる方法論には非常に困難な問題が含まれている。比較歴史言語学が、その成り立ちにおいて範をとった印欧語族においては、各分派諸言語が分岐したのち、地理的に離れ、互いの言語が独自の発展を遂げ、音韻変化と形態変化の相対的な順序関係を整合的に述べるのが可能であるが、ドラヴィダ諸語の場合、パローチースタンに孤立化したブラーフイー語や北インドに散在する少数民族言語を除けば、多くの言語が南インドに境界をもって隣接し、ある場合には大言語に取り囲まれた形で存在している。マイクロ言語領域という言葉が象徴するように、通時的、

137-4) や *nir. k-um-ōr* (Puram. 297-10) といった形態法が見られることから、関係節形成接辞に人称表示接辞が付加されるメカニズムの存在は否定できない。

IV Participial noun との張り合い

IV-1

上述のような過程を経て、人称表示接辞の初頭母音は長音化したと考えられる。長音化した母音を含むこれらの接辞は、人称名詞を形成する際の接辞としても一般化していった。

IV-2

ところで、ドラヴィダ諸語には、関係節形成接辞に代名詞（あるいは代名詞的要素）が付加される形式がある。Participial noun と称される範疇であり、格表示接辞をとることができ、統語上は名詞句として機能する。古代タミル語における形成法は、以下の通りである [Lehmann 1994: 137 ff]¹⁶⁾。

- (1) Verbalstamm + Tempus-/Negativsuffix + Demonstrativpronomen

vāl-p-avar (Nar. 217. 1)

leben-Npr-sie (3 plep)

, sie, die leben'

- (2) Verbalstamm + Tempus-/Negativsuffix + Pronominalsuffix

anañk-i. y-ōl (Aiñ. 259. 6)

quälen-Pr- 3 sf

, sie, die quälte'

- (3) adjektivisches Partizip + Pronominalsuffix

nir. k-um-ōr-kku (Puram. 297. 10)

stehen-Npr + Adj- 3 plep-Dat

, denjenigen, die stehen'

- (4) Verbalstamm + Nicht-Präteritalsuffix-(u)n + Pronominalsuffix

uva. kk-un-a! (Aka. 203. 1)

sich freuen-Npr- 3 sf

↘には分岐した後も、互いの影響関係を看過できない場合がある。前注の場合然り、また、否定関係節形成のような事例（早期古代タミル語で圧倒的に多い形式 *-ā-* が通時的に *-āta-* に取って代わられる。一方、古層カナダ語では平行的な *-ada-* 形式しか在証されない。）然りである。

16) この引用においては、本稿の文字転写法およびテキスト略号を用いた。

, sie, die sich freut'

これらのうちで、(3)は、上Ⅲ-3で言及した形式であり、(1)と(4)は、その形成法において、participial nounが格表示接辞をとることができる点を除けば、本稿の対象である定動詞構造と同形態をとる。後期古代タミル語で、人称表示接辞母音の長音化が一般化したことにより、張り合い状態が生じ、それぞれの機能的位置が不明瞭になったと考えられる。

IV-3

この張り合い状態を受けて、起こった変化が2つ想定できる。1つは長音母音による人称表示接辞を一般化した定動詞構造においては、時制表示接辞に人称表示接辞が付加されたとする再々解釈であり、もう一方のparticipial nounにおいては、長母音を含む人称表示接辞の代名詞化である。Agesthialingom [1979:150]の包括的な調査によると、下に見るように、上述(2)のタイプが早期古代タミル語に優勢であり、後代に至り、(1)のタイプ、*-av-*を含む形式(形態上は、*-a-*を避け、*-v-*を挿入したものであるが、結果形は、*a-*で始まる3人称指示代名詞と同形態となる)が取って代わり、一般化する。結果形は、関係節形成接辞に指示代名詞が付加された形式として、再解釈され、中期タミル語に継承された。ただし、形成の範囲は3人称に限定され、機能的には、制限を受けることになる。

	<i>-av-</i> を含まない形式	<i>-av-</i> を含む形式
Puram.	749	16
Kurun.	375	2
Paṭiṛru.	200	3
Akam.	1,072	19
Aiñ.	262	6
Naṛ.	236	4
Kali.	1,163	220
Pari.	204	40
Pattuppāṭṭu.	209	13
Kuṛaḷ.	904	163
Cilap.	1,115	42
Maṇi.	786	30

人称表示接辞が短母音を含む形式は、以下にみるように若干の例を除いて、優勢ではない。その殆どが前述の inflectional increment が先行し、長音化がブロックされている場合である。Participial noun の形成においては、関係節形成接辞に人称表示接辞が付加されてい

るとの再解釈作用が、本稿の対象である定動詞構造におけるよりも相対的に早い時期に起ころうとしていたのではなからうか。この分析の根拠は、*ō*-を含む人称接辞（具体的には、2人称単数、3人称単数男・女性、3人称通性）の時間的な分布である。Agesthialingom [1979: 150 ff]によれば、当該接辞は、早期古代タミル語において既に一般化しており、計量的に *ā*-を含む形式を凌駕するほどである。注7で述べたように、形態上、*ō*-形式は、*ā*-形式から派生し、時間的に先行することはありえないから、前者の一般化はかなり早期に行われたに違いなく、後者の一般化は更に早い時期に起こったに違いない。即ち、後代に participial noun となる形式においては、定動詞構造より、相対的に早い時期に、時制表示接辞+人称表示接辞という形式を、関係節形成接辞+人称表示接辞として再解釈したと考えることができるのである。*-av-*が一般化した後は、inflectional increment は、この範疇では、駆逐されていく。

短母音を含む形式

<i>iyai-v-en</i>	“I who will associate”	Akam. 369-1.
<i>mil. ku-v-aṅ</i>	“we who will return”	Nar. 313-9.

inflectional increment を含む形式

<i>punar-nt-aṅ-aṅ</i>	“he who joined”	Nar. 145-6.
<i>mev-iṅ-am</i>	“we who fitted”	Kurun. 270-6.
<i>olk-iṅ-aḷ</i>	“she who moved”	Patirru. 51-10.

長母音を含む形式

<i>iri-nt-āṅ</i>	“he who ran”	Puram. 284-8
<i>ceṅr-ār</i>	“they who went”	Puram. 337-3
<i>oppu-v-āḷ</i>	“she who will drive away”	Kurun. 72-5.

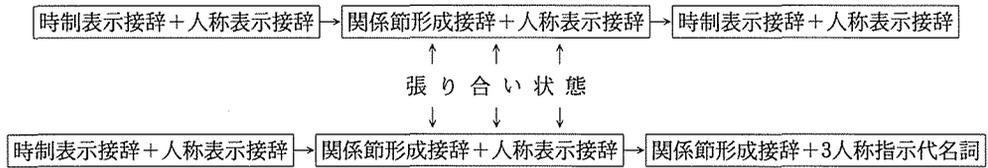
-av- を含む形式

<i>aḷi-tt-avaṅ</i>	“he who favored”	Kali. 146-4.
<i>ira-nt-avar</i>	“they who went beyond”	Cilap. 30-139.
<i>vāḷ-p-avaṅ</i>	“he who will live”	Kuraḷ. 34-24.
<i>āḷ-p-avar</i>	“they who will rule”	Maṇi. 23-104.
<i>naku-p-avaḷ</i>	“she who will smile”	Kali. 71-6.

おわりに

定動詞構造と participial noun の相対的な発展過程は概略、以下のように考えられる。本稿で観察した人称表示接辞の短音から長音への変化は、古代タミル語という数百年の幅をもった言語内の文法範疇の革新（それらを起こさせたのは、類推、再解釈、パラダイムの

均衡を図ろうとする言語的指向である) と有機的に関連して起きた現象であるといえる。



参考文献

- Agesthalingom, S. (1979) *A Grammar of Old Tamil with special reference to Patirrupattu*. Annamalainagar.
- Akattiyaliṅkam, Ca. (1983) *Caṅkat Tamil I, II, III*. Annamalainagar.
- Andronov, M. S. (1996) *A Grammar of the Malayalam Language in Historical Treatment. Beiträge zur Kenntnis südasiatischer Sprachen und Literaturen*. Wiesbaden.
- Caldwell, R. (1913) *A Comparative Grammar of the Dravidian or South-Indian Family of Languages*. (1974 rep ed). New Delhi.
- Dhamotharan, A. (1972) *A Grammar of Tirukkural*. *South Asian Studies No. V*. New Delhi.
- Iemoto, T. (1993) Re-examination of -a Adjectives in Old Tamil. In: Nara, T. (ed) *A Computer-Assisted Study of South-Asian Languages. Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project 4*. Tokyo, 16–27.
- Institut Français d'Indologie. (ed) *Index des mots de la littérature tamoule ancienne*. 3 vols. Pondicherry, 1967–1970.
- Israel, M. (1973) *The Treatment of Morphology in Tolkāppiyam*. Madurai.
- Lehmann, T. (1989) *A Grammar of Modern Tamil*. Pondicherry.
- Lehmann, T. & T. Malten. (1992) *A Word Index of Old Tamil Caṅkam Literature*. Stuttgart.
- Lehmann, T. (1994) *Grammatik des Alttamil unter Besonderer Berücksichtigung der Caṅkam-Texte des Dichters Kapilar. Beiträge zur Südasienschung Südasiens-Institut Universität Heidelberg Band 159*. Stuttgart.
- Meenakshisundaran, T. P. (1965) *A History of Tamil Language*. Poona.
- Ramachandra Rao, B. (1972) *A Descriptive Grammar of Pampa Bhārata*. Mysore.
- Subrahmanyam, P. S. (1971) *Dravidian Verb Morphology*. Annamalainagar.
- Subramoniam, V. I. (1959) Negatives. *Tamil Culture*. VIII, 32–43. Madras.
- 高橋孝信 (1989) Tolkāppiyam の成立について—タミル最古代の文典の年代論—『西南アジア研究』31, 20–37.
- Tirunelvēlit Teṅṅintiya Caiva Cittānta Nūrpaṭippuk Kaḷakam. (ed) (1970) *Tolkāppiyam commentary by Cēṅavaraiyar (Collatikāram)*. Madras.
- Zvelebil, K. (1973) *The Smile of Murugan, on Tamil Literature of South India*. Leiden.